

擲石例

石なごのたまのおちくるほどなさにすぐる月日はかはりやはする

〔榮花物語^{月一}の宴〕今の^上村の御心ばえ、あらまほしくあるべきかぎりおはしましけり、^中そ

こらの女御御息所参りあつまりたまへるを、^略御物忌などにて、つれづれにおぼしめさる、

日などは、おまへに召出て、ごすぐろくうたせ、へんをつかせ、石なとりをせさせて御覽じなどま

でぞおはしましければ、皆かたみになさけをかはし、をかしうなんおはしあひける、

〔小大君集〕おほむいしなとりのいしをつ、ませ給けるに、三十一有つれば、ひとつにひとつもじを

かきてまいらせける、

苦むさば拾ひもかへんさ、れ石の數にみなとるちよは幾つぞ

〔拾遺和歌集^{雜十}賀〕東宮のいしなとりのいしめしければ、三十一をつ、みて、ひとつにひとつもじ

をかきてまいらせける、

よみ人まらす

苦むさばひろひもかへんさ、れ石のかすをみなとるよはひいくよぞ

〔赤染衛門集^上〕女院のひめぎみときこえさせしころ、いしなとりのいしめすをまいらすとて、

すべらぎのまりへの庭のいしぞこはひろふこ、ろありあゆがさでとれ

〔玄々集〕馬内侍三首、いしなとりの石を、中宮にたてまつりける人にかはりて、

すべらぎのしるべの庭の石ぞこれ思ふ心ありあゆるまでとれ

〔散木弄詞集^五〕伊勢齋宮に侍ころ、いしなとりの石あはせといふ事せさせ給けるに、ちいさき草

子の、いしなとりの石のおほきさなるをつくりて、十の石にひとつ、かき侍ける、

くもりなくとよさかのぼるあさひには君ぞつかへんよろづ代までも^略下九

〔長秋記〕保延元年四月六日己酉女院いしなとり合云々、師仲銀大鼓に入友繪石進、第一云々、

〔守貞漫稿二十八〕石子

お手玉